

電撃でリョナ(テスト)

ryona 2 版

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

電撃で主人公ちゃんがりヨナられる話

目次

## 電撃でリヨナ（テスト）

私はこいつと決着をつけなければならない。私はタイタンと向き合った。奴が手招きすると同時に突っ込んだ。雷鳴の音をかき分けてハンマーを放つ。奴はそれを手で掴むや否や左手の先にある稲妻を呼び寄せたのだ。その稲妻は私に襲いかかってくる。

「う”あああ”あ”っ!!」

全身を焼かれる痛みで、その場に倒れてしまった。私が動けなくなっている間にターコイスが更に神器を振るう。

「おい!!俺にもやらせろがあっ!クソ女死ぬが良いさそれも悪くはないが」

ターコイスの追撃をタイタンがそれを止めた。今のうちに私は復活した。

「お、お前ら……何かに負けないッ!」

「あ?誰に向かって口聞いてんだ雑魚」

そう言つてターコイスは神器を振った。

「自惚れるなカスがyou?」

タイタンが腕を振り回すと、巨大な竜巻が起こった。竜巻は私を取り囲んだ。

「うっ、わっ、抜けない!」

竜巻の中で無数の雷が落ちてくる。それはまるで豪雨のように激しく、そして無慈悲に降り注ぐ。

「づああっ……」

私の体力を削っていくDENGKI……!!

ようやく抜け出すとターコイスが私を舐めるよう睨んでいた。

「死ねよ」

ターコイスがこちらを見た瞬間、私の足は凍りついた。

「ひゃーっはっはっはっは!!」

ターコイスは大笑いしながら攻撃を続けた。

「どうだ!これがオレの力だぞ?ん?」

「だあっ!いずう!きやあああああ!」

ターコイスが手を挙げる度を見計らって私は炎に包まれる様にした。痛い——しかし私は諦めなかった。

「私はもう逃げないッ！」

私は自分を鼓舞し、立ち上がった。

「へえ、まだやる気かよ」

「だって、私は守るものがあるからあ！」

私は言うが早いがタイタンを蹴り殺した。

「がっ……」

タイタンは血反吐を吐きながら地面に倒れた。それを見て私は勝利を確信した。だが、違った。

「はあ……はあ、今のは効いた……俺は強い相手と戦いたかったんだよ。だから俺も本気を出すとする。———《幻介》」

「えっ……!?!」

タイタンの身体が一瞬光るとその姿が変わった。顔には黒いマスクを付けており服装まで変わってしまったのだ。彼は両手に大きな鎌を持っていた。

「これは我が主様より授かった力……。これを使えばこの世の理を超える事ができるというものだ」

彼の姿が消えりと同時に腹部に衝撃が走る。

「があっ……」体が折れて、壁に激突した。

起き上がる前に今度は頭上に衝撃を受けた。私は膝をついて倒れるとそのまま首を掴まれた。《再生四海》の術式を展開するが中々身体は動かない。

「当たり前だ。俺の鎌力はお前の回復式が如何に優れようとも越えられないK A B E……よー」

「かっ……はっ……」首を掴む力が強くなり息ができない。

「お前を殺すならここが一番良いな。このまま殺すよりも苦しみを与え続ける方が楽しめそうだ……」

その言葉を聞いた途端背筋に悪寒を感じた。私は何とか振り払おうとするがびくともしない。諦めて切り札《鎚魅龕爆》をつかった。

「ここから第一スタートという帰結か」私はハンマーを回す。奴は



「まだ足りねえなア？次はどこが良い？」

すると彼はおもむろに

「ここなんかどうだ？」と胸の先端に触れた。

今までに感じたことの無い刺激が体中を駆け巡る。「やめてッ……  
触らないでえッ！」そう懇願するが彼の耳には入らない。今度は両手  
で両先端を攻めてきた。痛さと

「ん”ふああああんツ!!」

あまりの快樂に我を忘れてしまう。

「今度は気持ちいいだろ。快樂には耐えられまい」

さらに電流を流された時、股間に衝撃が来た。

「い”いっ!」彼が私の大事な所を手で握ったのだ。

「お前の体はもう俺のものだ。大人しくしろよ？」

抵抗も虚しく体を弄ばれる私は涙を流しながら喘ぐ事しかできな  
かった。

そしてついに私は気を失ってしまった……

「おお、やっと気絶したか。しかしここままでしてやってもなお俺のも  
のにならなかつたとは……惜しいな。さて……」

そう言って私を担ぎ上げる。次に何をされるのか分からないほど  
馬鹿じやない。

でも今の私には彼に齒向かうほどの力はない。私は目と股関を濡  
らしながら黒い未来に沈んでいった――